



# 瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

復活の主日A年（2026年5月3日）

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 6 章 1 - 7 節

第二朗読：ペトロの手紙 1 2 章 4 - 9 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 1 4 章 1 - 1 2 節

『ヨハネによる福音書』14章での「信じる」

「信じる」という動詞「πιστεύω」は、新約聖書で241回使われています。共観福音書の『マタイによる福音書』では10回、『マルコによる福音書』では14回、『ルカによる福音書』では9回遣われています。しかし『ヨハネによる福音書』だけは98回と多いです。特に、最後の晩餐から始まる告別説教の中では、13章で1回、14章で7回、15章は0回、16章では4回、17章で3回使われています。では特に「信じる」が多く登場する14章はどんな感じでしょう。

1a節 「あなたがたは心騒がしてはなりません。神を信じ(なさい)。」

1b節 「あなたがたは心騒がしてはなりません。・・・またわたしを信じなさい。」

10節 「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたがたは信じないのですか。」

11a節 「わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。」

11b節 「さもなければ、わざによって信じなさい。」

12節 「わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない」

29節 「今わたしは、そのことの起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったときに、あなたがたが信じるためです。」

そして、「知る」、「見る」、「聞く」といった知覚動詞も14章にはたくさん登場します。「知る」(ギノースコオー)は、単に、知識的に知ることではなく、かかわりを通して、御子イエスがどのような方であるかを深く味わい知ることです。

「見る」(ホラオー)も、単に目で見ただけでなく、知的に見る、認める、理解する、分かる、味わう、経験する、にあずかる、を意味します。

「聞く」（アクーオー）という用語は14章には直接には出てきませんが、弟子たちがイエスが「言う」ことばを、当然、聞いているわけです。この「聞く」も、単に耳で聞くだけでなく、理解する、聞き従う、耳を傾ける、聞き取る、理解する、という意味です。

つまり、「信じる」はやみくもに信じるのではなく、「知って信じる」、「見て信じる」、「聞いて信じる」といったように知覚のおこないを伴うことになります。弟子たちは、「知る、見る、聞く」ことでイエスさまを信じていったのです。

### 【ちょっとひと言】

イエスが示す父である神

今日の福音朗読を味わうために、イエスと父なる神との関わり合いについて前もって知っていた方がよいでしょう。イエスは、神を「アッバ、父よ」と親しみを込めて呼んで、はばかりませんでした。共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）の中にはイエスが父なる神との関係を示す箇所が見られます。

イエスの祈り（マコ14, 36）

父だけがご存じ（マコ13, 32）

祈るときには「父よ」と始めなさい（ルカ11, 2; マタ6, 9）

イエスはアッバ、父を信じておられた（マコ11, 22-23）

イエスはアッバ、父を愛しておられた（マコ12, 28-34）

イエスは父なる神に愛された子であった（マコ1, 11）

神が父であるということをわたしたちが知るためには、わたしたちそれぞれが抱いている父親像から出発しながらも、それを乗り越えて、イエスが示す父の姿へと到達しなければならないと思います。長い道のりかも知れません。